特選
2021
金融担当
大臣賞

第54回「おかねの作文」コンクール

思いやりのお金

栃木県・宇都宮市立一条中学校　2年　岩井　颯葉

自分の利益ばかりを考えてしまう私にとって、お金を使ってまで人や環境の役に立つことに、正直抵抗がありました。学校の募金活動でも結局、寄付はするものの、このお金でお菓子などを買ったほうが気持ちよくお金を使えるのにな、と心のどこかで考えてしまうこともありました。

そんな私とは対照的に、母は「お金を払ってもかまわないので何かの役に立ちたい」と考える人です。また、母はボランティアにも関心が高く、よくボランティアに参加します。中には、交通費や参加料のかかるものもありましたが、母は躊躇(ちゅうちょ)なく参加していました。そんな母を尊敬すると同時に、ある疑問が生まれました。なぜ母は他の人のためにたくさんのお金をかけるのか。私は気になって聞いてみました。

「役に立つことで自分が満足しているから、結局、自分のために使っているのと変わらないんだよ。」

と母は答えました。満足感を得たいなら、自分の好きなものや、美味(おい)しいものを買ったり食べたりして楽しむほうが手間もかからないし、何より、人ではなくて自分のためにお金を使ったほうが、より大きな満足感を得られるんじゃないの？　微妙な反応を見た母は、

「颯葉も人のためにお金を使って何かできたときの嬉(うれ)しさを体験してみたら。」

と言って、私を参加費つきのボランティアにいかせてくれました。

そのボランティアとは、簡単に言うと「ゴミ拾いボランティア」でした。具体的には、参加費500円でゴミ袋をもらい、そこに海岸で拾ったゴミをいっぱいになるまで入れて、その後ゴミ袋を案内所まで届けると、その500円を使ってゴミを処理してくれるという内容です。ゴミ拾いにお金を使うというイメージが全くなかった私にとってこの内容は斬新であり、やはり「ボランティアにお金を支払うのはちょっと……」という気持ちがありました。そして、どこか

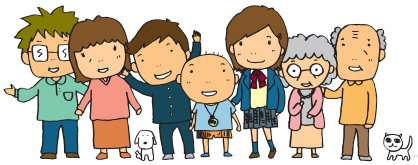
© 金融広報中央委員会2021

気乗りしないまま、私はボランティアを始めたのです。

しかし、汚いゴミがたまっていた海岸がきれいに変わっていく様子、時間がたつのにつれて仲良くなっていく同じ参加者の人たち。それらを見ていると、心がプラスの感情で満たされていくのを感じました。ゴミを拾うことでの達成感、ボランティアに参加したことで生まれたコミュニケーションなど、自分にとってたくさんの経験が得られた上に、これが誰かのためにもなる。これってなんだかお得だなと思いました。母が言っていた、「人のためにお金を使ったときの満足感」とはこのことだったのかもしれない。そんなことを考えながら、ボランティアは終了しました。

この体験を通して気づいたことは二つあります。一つは、お金で買えるのは物の他に、経験、感情、意志など、私が気づいていないだけでまだたくさんあるだろうということ。私は参加費500円でボランティアという経験、嬉しい、楽しい、満足といった感情、さらにこれからは人のためにもお金を使いたいという意志までをも買うことができました。これらは一瞬の満足感だけで終わってしまった買い物とは比べものにならないくらい価値があると思います。そして二つ目は、思いやりは経済を回せるということです。海岸をきれいにしたい人と、気軽にゴミ拾いをしてもらうために工夫をしたい人。お互い、何かを思いやる気持ちがなければ今回のボランティアは成立せず、もちろん参加費分のお金が流通することもありませんでした。

他の人のためにお金を使うことを苦手としていた過去の自分。そこに足りなかったのは、「余裕のあるお金」ではなく、「他人を思いやる心」だったんだなと思います。そして、そんな「思いやる心」を相手に繋ぐバトンの一つがお金です。有意義なお金の使い方を学んだ今、私は困っている人に少しでもお金を使いたいです。そして、次はその人が誰かや何かのためにお金を使ってくれる。そんな繋がりが広がっていくことを私は願っています。



© 金融広報中央委員会2021